

---

# くまさん

有沢縫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

くまさん

### 【Nコード】

N5865D

### 【作者名】

有沢縫

### 【あらすじ】

彼は俺をまもるために姿を消したのだ。

## （前書き）

掌編小説たちの群。少しシュールレアリスム混じる。  
シリーズではない作品、短いもの。詩のようなものも。「私」は男性視点。

病床について暫く経った。半ば氣力が奪われていたために、それのせいで体調不良がまだ続いているらしかった。もう太陽が昇ってしまったて、部屋に明かりが差し込んでいる。それに気付いて一度目、携帯を覗くとまだ九時だった。もう一度携帯を覗いたときは十二時だった。そろそろ起き上がらなければ、今度は眠りすぎて頭痛が酷くなるだろう。そう思ったが結局布団から出ることが出来ずに、むしろ掛け布団を頭の上まで引き上げてしまった。

そこからぼんやりとした記憶に変わったが、俺にとってそれが最も幸福な時間であることは確実だった。

隣にいる男が誰なのかは分からない。しかし、それが随分と長い間想いつづけてきた相手であることはすぐに分かった。そのときは違和感などなく、彼が自分の想い人であることを何ら疑わずに理解していた。胸が躍るとはこのようなことを言うのか、俺は何気ないふりをして彼に甘えてみた。彼は大層な美人で、しかし男らしくかった。もしかするとテレヴィで見た顔だったかもしれない。そう、彼の職業は恐らく俳優。くしゃくしゃに草臥れたような黒髪は少しだけ長く、優しく微笑する目が少し眠たげだった。彼は若く、正に今の人だった。甘える俺に彼は少しだけ頭を撫でただけだったが、寄り添えばそっと抱き寄せてくれた。そこからはまるで恋人がじゃれあうかのような緩やかな時間と、駆け引きのようなものが始まった。俺は早く彼に抱いて欲しかったのだ。そう願うことが決して罪ではないような気持ちだった。病床にいる俺は、病人だ。だからこうまで素直になれるのだろう。彼の胸元に頬を寄せ、腋の下に鼻先を埋めると、視界は暗くなり、そしてほんのりと彼の甘い香りが流れ込んできた。大きな手の平が俺の頭を包んだ。そして俺の名を呼んだ。遠くの外で工事をしている音と、何かわからない秋の空の音、そして小さく鳴っているテレヴィの音。何よりも大きかったのは近くに

ある彼の呼吸と、脈の音。そうして俺は上向いて、彼は漸くくちづけをした。そのまま下に横たわるように身体を倒され、彼が上にのぼった。くちづけをしたまま、俺は彼の背に手を回した。

そのとき俺は自分の性別を疑った。もしかして、俺は女だったのだろうか？　しかし朦朧と沈む意識の中で、もはやそんなことはどうでもよかった。彼に流される快樂のほうに、先決だった。

「あんた、誰と寝てんの」

ふと冷たい声が聞こえた。それは酷く俺を輕蔑する声だった。はつとして視線だけをそちらに向けると、母が扉の向こうで、ごつごつに膨れ上がった買物袋を持ったまま硬直していた。俺は青ざめた。だが精一杯、この状況に抵抗をしようと無駄に足掻いたのだった。

「クマ……」

なんと苦しい言い訳だろうか。俺はもう圧し掛かる彼の背に腕を回し、唇を尖らせてくちづけに応えているのに。しかしそうやって正面の彼の顔を見ると、それはいつも俺が抱いて眠る、クマの形をした大きな抱き枕だった。俺はクマとくちづけをしていた。

ではあの腕は？　あの温かい腋下は？　彼の黒い髪は？　唇は？　ほんのわずかにだけ痛い無精髭は？

母親は溜息を漏らし、胸を撫で下ろして扉をむこうに歩いていった。枕を抱き締めた腕が硬くなっていた。彼はどこに行ったのだろうか。絶望した。そんなはずはない。彼が俺を見捨てるはずなどないのだ。

秋の心地良い風が、するりと頬を撫でた。そうか。彼は俺を守るために、姿を消したのだ。彼と俺だけの秘密なのだ。次は必ず彼に抱いてもらおう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5865d/>

---

くまさん

2010年10月12日11時29分発行